

軍縮

問題資料

12月号 No.85 定価300円

(送料50円)全国有名書店にて発売

雑誌 03239-12

専用ファイル(一年分収納可) 1,000円(千240)
'83-'85年版合本(ファイル綴) 各3,400円(千400)
'86年版合本(ファイル綴) 4,600円(千400)

軍縮平和の大道を歩め
—竹下新内閣に望む—
宇都宮徳馬

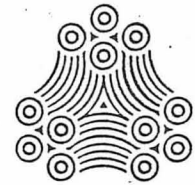
のら 人から 今日国際政治と軍縮運動 北沢洋子
立場 激動する日本が見える 辻元清美

山岡清二の「軍縮英語教室」 山岡清二
対決から友好接近へ 豊田利幸

第37回バグウォッシュ会議

その後の「国家秘密法」 竹岡勝美
「シーレン防衛」のうら・おもて 藤島宇内
李厚洛証言は 朴龍鎬
政治決着白紙化の新証拠 編集部
貴重な「読者の声」収録
ゴルバチョビズムとペレストロイカ路線 中沢孝之

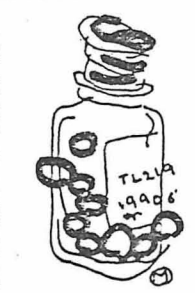
宇都宮軍縮研究室
〒107東京都港区赤坂2-10-8
信和ビル5階 振替・東京3-79080
TEL (03) 584-4268



『ワイトゲンシュタインと禪』
黒崎 宏
『ワイトゲンシュタインとデリダ』
ヘンリー・ステーン/高橋哲哉訳

意外の組み合わせで思想をさぐる試み

哲学書房 一五〇〇円
産業図書 二五〇〇円



『仏教と神道』
新潮選書 七〇〇円

いつまでも続く自問自答や
反実仮想の迷路——
ワイトゲンシュタインのテク
クストにとらわれると、不思議の
國にまよいこんだアリスのよう
に、イライラ途方にくれてしま
う。だがそれだからこそ、彼の
仕事は最近ますます注目を集めて
いるようだ。出口の見つけ方ひとつ
で、迷路も楽園に一変するのかもしれない。

『ワイトゲンシュタインと禪』
は、とりあわせの妙で目をひく
題名の本だ。はて、ワイトゲン
シュタインが仏教に関心をも
ってたかな？
著者黒崎氏によると、『論理
哲学論考』などからうかがえ

るワイトゲンシュタインの心境
はまさしく禪の境地そのもの
なのだ。仏教徒のためにやさしく
書かれ、ワイトゲンシュタインの
紹介部分も手慣れたいて、彼を
ひとわり知りたいむきには便利
である。ただ論理構成のほう
は、いささか心もとない。たと
えば「明らかに、ワイトゲン
シュタインが言うことと神
論(『禪僧』)が言うことと
は、まったく同じ(『振りか

えれば部屋の出口は開いている)』
です。従ってワイトゲンシュ
タインにとっては、哲学するとい
う事は、禪の修行にも似た一種
の修行であることになりま
す(一九六)とあるが、たまたま
同じ内容のことを喋ったところ
があるくらいで、思想の実態も
同じはずだとあっさり結論され
てはたまりません。

ひろ さちや
『巫女』の違いは？など、
初心者を抱く素朴な疑問に解
答がなされている。
説明のしかたも立体的で、
『山伏の衣装』の意味や玉
串のあげ方のハウツー、

ば、ワイトゲンシュタインの
思想が仏教と関連するはずが
ない、と言っているのではな
い。あるレベルで通底する、
と言えると思う。ただしそ
れには、両者の構造を体系的
に比較対照する周到な方法が
必要だ。それなしにいくら、
「ね、そっくりでしょ」と言
われても困る。そもそも、ウ
イトゲンシュタインのテクス
トに、彼の「真意」や「境地」
を探してしまふ昔ながらの発
想が、彼の思想を裏切ってい
ないか。

が国同様、米国の批評界も、
猫も杓子もデコンストラク
ションということらしいが、著
者のデリダ読解は正確でな
かなか説得力があり、本書から
察する限り、かの地で脱構築
はいちおうの水準で議論され
ているようだ。
本書のミソは、フッサール
↑デリダ初期ワイトゲン
シュタイン(ないし英米系主流
哲学)↑後期ワイトゲン
シュタイン、という脱構築の並
行関係を提示した点にある。こ
の関係が成立するかどうか、
判断の微妙なところだが、興
味ぶかいのは、デリダが本書
に推薦文をよせている点で、
デリダ本人にとって、この解
釈は満足すべきものらしいの
だ。

現象学の文体と問題構成に内
在しつつそれを食いついてい
った企図の必然を、アリスト
テレス以来の哲学史の伝統の
なかで照らしだす。そして、
その脱構築作業の唯一最大の
先行者として、ワイトゲン
シュタインを指名する。デリ
ダはイデア的なもの(たとえ
ば言語)が現前することの矛盾
に攻撃を集中し、「声」にか

えてエクリチュールの運動を
追尾したのだ。主観や現
前の範囲外で機能し続けるの
がエクリチュールである。こ
の着眼がワイトゲンシュ
タインの、言語ゲームの思想と
呼ぶところの指摘は斬新だ
た。
翻訳も着実で、安心して読
めたことをつけ加えておく。
(はしづめ だいさきょう・社会学)

『鳥居の様式』のあれこれな
どを図解やイラスト、写真で
盛りだくさんに紹介してあ
る。著者はこの本の前に、
『仏教とキリスト教』という
同様のQ&Aブックで話題に
なっている。(晴)

『矢田哲次全集』全一巻 未
来社 八五〇〇円

一九三九年から四四年まで
福岡を中心に出され、鳥居敏
雄も加わっていた文芸誌『こ
ろろ』のメンバーで、四三年
一月に二五歳で死んだ詩人
の、全文章が集められてい
る。『四季』的なリリズム
に近いところにいた詩人だ
が、その詩や書簡等を読む
と、戦争や戦時体制について
の感性に、いままさらながら驚
かされる。

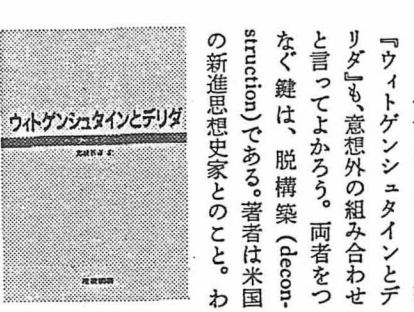
折角のテーマであるし、著
者の力量もとてもこの程度で
ないはずなので、つぎの著作
での発展を期待した。

もう一冊、H・ステーン著
『ワイトゲンシュタインとデ
リダ』も、意外の組み合わせ
と言つてよからう。両者をつ
なく鍵は、脱構築(decon-
struction)である。著者は米
国の新進思想家とのこと。わ

ワイトゲンシュタインの
ほうはとくに死んでしまっ
たから、何と云うかわからな
い。ただ「めいめいが自分
自身で考えるように」と言
いのこしたことからすると、
本書はマル、ということになる。

『女のまじりくすり宣言』
京都発 学芸出版社 一四〇〇円
桂坂の会・女の目で見える
まじりくすり研究会編

『二流市民』の目で見た都市の欠陥
宮迫 千鶴



「脱構築」作業の先行者
著者は、デリダがまずフ
ッサールにとりつき、超越論的

いわゆる都市計画というも
のの多くは、行政の管理的視
点や、企業や商店街の経済的
視点から先行されることが多
い。その結果できあがるのが、
日本列島を均質な風景に変
えてしまっている「近代化
都市」なのである。
管理的視点や経済的視点と

は別の言葉で言えば、男社会
を支えている合理主義にもと
づくマクロな見方である。こ
の日本において、「近代化」
がとりあえず善であるとして
いたつて最近までは、マク
ロ的な見方は進歩と発展を生
み出す正しい基準とされてい
た。

ヴァレリーやアラランやヴァ
ージニア・ウルフに熱中し、
恋愛に苦しみ、優しい詩や短
歌を紡ぎ出す精神が、叙情を
もってびたりと戦争により
その、恋人と戦争を同じよう
に柔らかに抱きえなことに、
深い戦慄を覚えざるをえな
い。(透)